

非類似の他者に対する共感性と態度の研究

——個別性とストレスコーピングの視点からの検討——

古 川 弘 子

目的

非類似の他者を理解するためには、共感性と個別性の2側面のバランスが重要と本研究では考える。また、非類似の他者との対面場面は一種のストレス場面と想定され、観察者の日頃のストレスコーピングのあり方が関連する可能性が示唆される。本研究では、共感性と個別性の高低による類型が非類似の他者に対面した際どのような態度を示すのかを、ストレスコーピングを交えて明らかにすることを目的とした。

方法

調査協力者：近畿圏の私立大学の大学生、大学院生 327 名（男性 178 名、女性 149 名）、平均年齢 20.08 歳（SD=1.77）。使用尺度：多次元共感性尺度（鈴木・木野，2008）、個別性尺度（宇留田，1998）、パースペクティブ・テイキング尺度（中江・古賀・平田・山口・坂井・押見，1999）、短縮版対人ストレスコーピング尺度（加藤，2002）の他に、非類似の他者との対面場면을調査協力者に想起してもらうため、非類似の他者を想像・想定するための質問、非類似の他者との相談場面スクリプト、非類似の他者に対する態度尺度の3つを調査者が独自で作成し共に使用した。

結果

共感性と個別性・PT の特徴と類型を知るためクラスタ分析を行った結果、個別性と感情側面を持つ「個別・感情喚起型」、個別性と認知的側面を持つ「個別・視点分化型」、共感性と視点の分化を持つ「共感・視点分化型」、自他ともに無関心かつ個別性が低い「無関心・自他融合型」の4つのクラスタに分かれた。加えて、各クラスタと各コーピングによる態度の違いを知るため、2要因の分散分析を行った。その結果、ネガティブ関係コーピングが否定的態度及び無関心的態度との間で主効果が認められ、解決先送りコーピングでは肯定的態度との間で交互作用が認められた。

考察

本研究では非類似の他者に対し、共感性と個別性のバランスが重要であると考え、それらの下位尺度からクラスタ分析にて両側面の特徴を明らかにした。クラスタの中でより個別性の認識に基づいた共感性的の形に近いと考えられる「共感・視点分化型」は、解決先送りコーピングが高くとも低くともその特徴を引き出し、非類似の他者に対してより肯定的な態度を示すことができることが明らかになった。